言語学的要素からインタラクション分析への橋渡し

意味論・語用論的概念を応用して

早瀬　尚子（大阪大学）

１．はじめに

言語学はこれまで、基本的には状況描写文と呼ばれるタイプのものを中心に研究対象としてきた経緯がある。伝統的には「世界・事態がどのようなものであるか」を、現実に即した形で客観的に捉えたものと考える古典的な意味論に基づくものが主流であった。これに比して認知言語学は「世界・事態を概念化者がどのように**捉えているか**」という主観を反映したものだとして、その差異化をはかってきた。

しかし立場は違っても、どちらも共通して、その主な研究対象を、考えや観察内容の表出といういわば独我論的な表現ばかりを扱っているという指摘もみられる。言語の本来の役割を考えると、思考の表出のみならず、相手への伝達という側面も考慮すべき欠かせない特徴である。認知言語学も、実際に使われている言語表現やその場面を重視して分析を行うことを標榜するなら、その研究範囲や関心のありようを拡大する必要がある。

このような問題意識から Croft (2009)は、語用論や社会言語学的考え方を取り込むことで、認知言語学をコミュニケーション理論へと解放する必要性を説く。概念化者のみの世界で閉じていた言語分析を、対人関係的なインタラクションの場面にも応用すべしということだが、具体的にはどんな可能性があるだろうか。

このヒントとなる一つの提案・試みが本多（2006）によってなされている。本多（2006）では、共同注意における三項関係を下敷きにして、それまで認知言語学が得意としてきた「話者のとらえ方」を、聞き手への「見せ方」として提示するという方法で、対人関係的な言語使用へと適用範囲を広げていくことができると考えている。もしこの方法が可能であるならば、これまでの言語学で用いられてきた概念を用いるという素朴な方法であっても、インタラクション分析に迫る可能性を秘めていることになる。

以上を踏まえて本発表では、伝統的な意味論・語用論および認知言語学での基本的な概念を用いた表現を「相手に提示」することで、どこまでインタラクション分析が可能か、その試行をおこなった。インタラクションの例として、筆者が経験したカウンセリング場面でのカウンセラーとクライアントとのやりとりを、本人が特定されないように改変したものを使用した。発表では、クライアントの発言をもとにカウンセラーがどのようにクライアントの思考に対する推測を行い、またどのようにクライアントの思考や行動の変容を促すか、を具体的に検討した。本報告では紙面の関係から、すべてを掲載することはかなわないため、以下部分的に抜粋する形で、伝統的な言語学的概念がどのように応用可能か、その考え方を簡略化して示す。[1]

２．前提と語り

前提とは、ある文が適切であるために、真であることが保証され踏まえられているものである。(1a)では（　）内の He went there は真として成立しており、それがいつだったのかを When で尋ねている。他も同じである。

(1)　a.　When did you go there?　（前提：He went there.）
　　b.　What do you think when your boss says, ‘Oh, you’ve changed your hair’?　（前提：your boss says x）
　　c.　Which do you prefer, dogs or cats?　　（前提：you like dogs and/or cats）

この前提を含む表現をそのまま相手に用いることで、相手に前提を受け入れることを強制する効果がある。

(2)　a. How fast was the car going when it ran a red light?　（Yule 1996）
　　b. （電車で騒ぐ子どもに）「おとなしくしますか、それとも帰りますか？」（早瀬（2022））
　　c. 会社からの第一声として、「奥さんおめでとう！育休はいつとるの？」と聞くようにしています.
　　（育休取得率が高い企業へのインタビュー）　（早瀬（2022））

話し手にとって前提とされている・したい内容を含む形式の文を相手に直接投げかけることで、相手にその前提を受け入れさせ刷り込む効果、別の言い方をすると「誘導」という効果をもつと言える。

３．否定のメタ性と語り

否定は論理学的に見てその肯定を前提とする。Don’t think of an elephant は、まず elephant の存在を前提としており、それを受け入れて思い浮かべてから否定するという二重の認知プロセスを必要とする。

この否定文の使用はインタラクション分析において興味深い推測をもたらす。具体的には、語りにおいていきなり否定文を使う人の思考を推測することができる。以下は姉との確執に悩むクライアントの語りである。

(3)「今朝はイヤな夢を見ました。今月は姉の誕生月なのですが、私は気になりながらも忙しくて**お祝いを送ることができていませんでした**。そこで姉が夢に出てきました。夢の中の姉は終始ニコニコ黙っていて、『いつもきちんとしてあげているのに』とかいうことは**一言も言っていませんでした**」（早瀬 (2022)）

否定文は常に肯定文を浮かび上がらせる。クライアントは、「自分はお祝いを送るべきである」と思っていたし、姉は「いつも～のに」とクライアントを責める人物だ、ということが、ここからうかがえる。否定のもつ前提の力を推測することで、その発話者の思考やこだわり、懸念といったものが垣間見られる。

４．視座と語り

認知言語学では、言語表現が必ずしも明示化されない概念化者の観点から語られるものであり、その存在が言語表現から露呈すると考えている。例えば He lives across the river.（川を渡ったところに住んでいる）からは、その発話者が彼の住まいの対岸であるこちら側にいることがうかがえる。

このような文を仲間に投げかけることで、概念化者個人のものの見方の連帯感を醸し出すことがある。例として、卒園アルバムにおける親から子へのメッセージ「卒園おめでとう。これからも弱い人にやさしくして、すくすく良い子に育ってね」からは、この親から見た子どもの目に映る対象が主に「弱い人」であること、またそこから転じて自分の子は相対的に強者に位置付けている、ことも同時に感じられる。さらにはその親の世界観を子どもに投げかけることによって、子どもも同様な世界観を無意識に自分のものとして会得していく可能性も高い。言語表現の使用は feedback loop を成し、思考形成に寄与していくことになる。

５．メタファーと語り

認知言語学が得意とする「メタファー」は、抽象的領域の概念を、具体的領域での体験・経験に根差した概念を写像することで理解するものである（Lakoff and Johnson (1980))。(4) に見られる具体的なメタファー表現から、概念メタファーとしての ARGUMENT IS WAR が抽出できる。

(4) ARGUMENT IS WAR（Lakoff and Johnson (1980))

a. Your claims are indefensible. b. He attacked the weak point in my argument. c. I’ve never won an argument with him.

カウンセリングの場面でメタファーを利用することで、問題に対する捉え方を変容させることも可能である。

(5) A「プレゼンとか怖いんですよ。自分の考えを攻められたり、弱いところをつかれたり。なんか攻撃されてる気がして」B「友だちに話をしていると思ってみるのはどうですか。友だちはわからないところを聞いてきているだけなので、あなたの考えを教えてあげてください。対戦や防御じゃなく、相手と対話しているとしたら、気が楽になりませんか」

A が PRESENTATION IS WAR というメタファーを通じて物事を捉えていたのを、B は PRESENTATION IS DIALOGUE という別のメタファーを提示し、捉え方のフレームを変化させようとしている。カウンセラーによる捉え方を提示して、クライアントと共有することができれば、もしかすると思考から行動に落とし込めるかもしれない。

６．まとめ

以上みてきたように、前提や否定など従来の意味論・言語学的な概念や、主体的表現やメタファーといった認知言語学的な概念も、インタラクション分析に応用できる可能性が十分にある。クライアントの思考を推測したり、新たなものの見方を提示したり、という方法を通じて、概念化者のとらえ方を対人的に提示し共有するというコミュニケーション理論へと応用していくことが可能である。

注　1. 詳細については早瀬（2022）および早瀬（近刊）も参照のこと。

参照文献（言及したもののみ）

Croft, W. (2009) “Toward a Social Cognitive Linguistics,” *New Directions in Cognitive Linguistics*, V. Evans and S. Pourcel, (eds.) 395-420. John Benjamins. / **Lakoff, G. and M. Johnson（1980）** *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press. / **早瀬尚子**（2022）「カウンセリングのことばに見る認知言語学的世界観」『認知言語学の未来に向けて一辻幸夫教授退職記念論文集』170-181.開拓社 / **早瀬尚子（近刊）**「カウンセリングのことば」『シリーズ　ことばの認知科学（仮）』朝倉書店. / **本多啓（2006）**「認知意味論，コミュニケーション，共同注意－捉え方（理解）の意味論から見せ方（提示）の意味論へ―」『語用論研究』第 8 号，　1-14. / **Yule，G. (1996)** *Pragmatics* (Oxford Introduction to Language Study Series)，Oxford University Press.